

2131052 黒田英寿

私がカンタベリーやロンドンに行き、思ったことは3つあります。

一つ目は人の温かさです。日本人が世界的に見て一番親切だ、という話をニュースや留学生からたびたび聞き、自分もそうなのだなと思っていました。しかしここ イギリス カンタベリーにきてその考えは少し変わりました。具体的にどんな場面でそう感じたかという、知らない人にあいさつしたときの反応です。知らない人といっても、店員さんや、パブで近くに座った人、街中にて前を歩いていた人にドアを開けてもらった場面です。しかもただのあいさつで終わらず、have a good time や How was your weekend?など、知り合いでなくても相手を思う言葉を相手側から気さくにかけてくれるのです。こんなことは日本ではまずありません。このようなことを日本でやると、「知らない人なのになんで声かけてくるのだろう」「変質者かな、こわいから離れよう」となってしまうと思われまます。昔からの日本人の性格が内気な人が多いのと、文化の違いによるものなので仕方ないかもしれませんが、外国人特有の陽気さと相手を思いやる気持ちで声をかけてもらったほうが日々のちょっとした挨拶によって、元気、やる気、人間関係が、知らない間によくなっていくのではないかと自分は思います。また、そこでコミュニケーションが生まれるので、日本ではよくある人間関係の悪化や孤独死の改善にも間接的にかかわっているのでは、という考えも思いつきました。

二つ目は授業の雰囲気です。日本の授業は基本的に座学の割合が多く、授業中は列に並びきちんとした姿勢で座りつつ、聞くだけの授業が多いです。これによって起きる問題は、生徒が受け身になってしまうことです。聞くだけの授業により、静かな空間での手を挙げる自己主張や、発表時に間違っしてミスをしてしまうことを恐れてしまい積極性がそがれる恐れがあることです。しかし外国での授業は違います。まず、先生の高いテンションと雑談のような雰囲気により、自己主張がしやすくなります。また「失敗を恐れなくて、間違っるのが普通なのだよ」という先生の言葉により間違っしたときの罪悪感を消し飛ばしてくれます。これにより、自分で考え積極的に自己主張をする心を育てられ、アクティブで偏差値の高い人間が排出されるのだなと理解しました。また日本で一番頭が良い大学は東大ですが、世界と比べると下になってしまう理由もこれに含まれているのだと考えます

三つ目は日本では習ってこなかった単語の多さと発音です。授業内では比較的知っている単語や文章を多く見受けられましたが、毎週火曜部に行われていたイングリッシュカンパセッションやほかの留学生との会話で出てくるものは、聞いても全く想像できず言葉のキャッチボールが上手くいきませんでした。しかしその後友人やイングリッシュカンパセッションのマットさんが分かりやすく説明してくださったので大変勉強になりました。特にためになった単語を紹介します。例えば Lucid dream , messed up , downpour , drizzle , fermentation , vomit , chilly , boarding , lovely. などです。messed up は「いま、頭が混乱していて、めちゃくちゃだ」という場合に使えます。

Chilly は「寒い」という意味ですが、単に寒いという意味でなく、cool と cold の中間「肌寒い」の意味があります。chilly boss, chilly greeting, chilly look のように人や場所、態度、行動に対しても使うことができるので表現の幅がとても広がりました。

Lovely は幅広い意味があり、イギリス人が good や nice の代わりに使うほど使い勝手が良いです。実際にイングリッシュカンパシーションの時の主催者のマツさんが口癖のように使っていたので印象深いです。

またこの時に印象に残っていたことは納豆を知らない人に、英語で説明する時間でした。日本人同士なら簡単なのですが、外国人に対してとなると難易度は何段階も上がります。自分より英語ができる人もその場にいたのですが、なかなか言葉が出ず苦戦していたので本当に良い刺激になりました。英単語等を英語で説明する。この時本当に頭をひねり出して言葉にするので、この時間は日本の英語の授業に取り入れればかなり面白いのではないのかと思いました。

今回の英語講座を受けて文化、価値観、文法、単語、全てにおいて良い刺激を受けました、一か月という短い期間でしたが、ほんの少し成長できた貴重な機会で、充実した学びの時間でした。感謝で胸がいっぱいです。